

記念講演「菅茶山と廉塾」

講師 西村直城先生

広島県立歴史民俗資料館学芸課長

一、菅茶山について

漢詩人 漢詩集『黄葉夕陽村舎詩』教育者。廉塾

・国特別史跡「廉塾ならびに菅茶山旧宅」

宮島厳島神社（国特別史跡＋特別名勝）と並ぶ

・「菅茶山関係資料」は国重要文化財に指定された。

＊これらは誇り得る類い稀なステイタスである。



頼祺一氏や広島大学の協力を得て、茶山関係資料の調査に携わった。2004年、文化庁の指示を受け、中途、東北地方大震災のため中断のやむなきに至ったが、細やかな資料の精査を続け、遂に2014年、国重要文化財の指定に漕ぎ着けた。

二、何故『廉塾』は教科書に載らないのか

全国の主な私塾、適塾（大坂・緒方洪庵）懐徳堂（大坂）松下村塾（萩・吉田松陰）、鳴滝塾（長崎・シーボルト）咸宜園（日田・広瀬淡窓）などは高校の日本史教科書に掲載されているが廉塾はない。

篠崎小竹は、『遠思楼詩抄』初編序で、「淡窓は菅茶山と並ぶ有名な教育者で、ともに詩を重んじ、詩を用いて人材を育成した」と評している。

三、菅茶山と広瀬淡窓

共に江戸時代後期の儒学者で漢詩人として名を成し教育にも尽力した共通点の多い菅茶山と広瀬淡窓を比較してこの「何故」に迫りたい。

○茶山く父 備後神辺 菅波樗平 農業・酒造業

学歴、茶山19歳 市川某に古文辞学を学ぶ

24歳 那波魯堂に朱子学&和田泰純に医学を学ぶ

33歳 京阪地方遊歴、混沌社中と交遊

享和元年 福山藩儒となり藩校弘道館に出講

文化6年 『福山志料』編纂

文化12年 出府中、松平定信侯に招待される

文政2年 『風俗御問状答書』完成

○淡窓く豊後国日田 廣瀬三郎右衛門 代官所御用達

商人。中井竹山・履軒と知己

8歳 長崎 長福寺法幢上人らに学ぶ

16歳 福岡 亀井南冥・昭陽に学ぶ

18歳 大病で帰郷

文政2年 日田代官用人格

天保元年 代官所が塾経営に干渉する

天保13年 幕府が苗字帯刀を許す・大村藩に出講

弘化元年 豊後国府内藩に出講

四、廉塾（菅茶山）vs 咸宜園（廣瀬淡窓）

①施設（名称）設備

○茶山

安永4年、居宅に開塾→天明年間「金栗園」

寛政3年、前年新築の建物で開塾「黄葉夕陽村舎」

寛政8年、建物等を藩に献上→「神辺学問所・廉塾

○淡窓

文化2年、長福寺学寮に開塾、「成章舎」桂林荘

文化14年、咸宜園と改名

文政4年、咸宜園東塾落成

②学区・教育内容・教育方針・規約&心得

塾生は廉塾・咸宜園とも全国から集まる。平等主義

（身分・年齢・学歴不問）を取り、漢籍の講釈が中心

○廉塾く詩文は月6度の詩文会だけ（義務とする）

「廉塾規約」（45項目、塾・寮での共同生活重視）

○咸宜園く詩作を奨励「葵卯改正規約」（82項目）

入塾後は徹底した能力主義で評価。「月旦評」明治

30年まで存続、門下生も高野長英、大村益次郎、上

野彦馬（日本最初の写真家、龍馬撮影）、清浦奎吾

（1924年内閣総理大臣）

五、後継者

○茶山（廉塾）

寛政12年 末弟恥庵死去

文化8年 都講頼山陽出奔・甥萬年死去

文政6年 都講北條霞亭死去

文政10年 姪孫・菅三を養子

文政10年 80歳で死去

○淡窓（咸宜園）

天保元年 弟旭荘に塾主を譲る

天保7年 旭荘東遊、再び塾経営

弘化元年 咸宜園の都講矢野範治（青邨）を養子とし塾を継がせる

塾を継がせる

安政3年 旭荘の長男・林外塾を継ぐ

安政3年 74歳で死去

六、茶山と淡窓の交流

寛政9年 淡窓15歳、50歳の茶山の名と詩を知る。

福岡遊学中、茶山が「詩の名家」と知る。

淡窓27歳、自作詩の批評

淡窓45歳、茶山揮毫の

文政10年、淡窓46歳、

数力月間介護にあたる。

あての漢詩と遺品として

七、残された課題

幕末以後、天領の塾と福山藩の郷校の位置付けが関係したのではない。また、塾としての評価より茶山は漢詩という文学面での評価がなされているのではないか。



淡窓問、ける

(顕彰会顧問 上泰二)